

# 労働映画百選通信 No.01 2015.8

発行 ■ NPO法人 働く文化ネット 編集 ■ 清水浩之 〒101-0062 千代田区神田駿河台3-2-11 联合会館5F

あなたのおすすめ「労働映画」は？

**【労働映画についてのアンケート調査】実施しています！**



労働映画 スペシャルサイト  
<http://hatarakubunka.net/>

いま、働くことをめぐる困難がますます高まる中で、世界の多くの国々で労働を主題にした多くの映画作品が製作され、人々の共感をあつめています。そして、映画と労働の世界との関わりについての歴史的関心もまた高まっています。日本映画も同様に労働に向き合ってきた長い歴史を持ち、現在も多くの労働映画が産み出されています。

そこで、私たちは日本の映画作品が、仕事と暮らしの実態、働く人たちの悩みと希望、あるいは働くことの意義と喜びをどのように描いてきたかを考察し、現在と未来に向けての教訓をくみとることをめざし、**日本映画百年の歴史が産んだ代表的労働映画百本**を選ぶ作業を進めています。

その活動の一環として、映画と労働の世界にご関心を持つ多くの方々に、これまでに見た日本の労働映画の中で、もっとも印象に残る作品、多くの人に見てほしいと思う作品についてお教えいただき、日本の代表的労働映画百本を選ぶにあたっての参考にしたいと考え、アンケート調査を実施することとなりました。

調査は無記名であり、ご記入いただいた内容については統計的に処理しますので、個々の調査票を公表したり、調査の目的以外に使用することは一切ございません。

つきましては、調査の主旨をご理解いただき、ご協力くださいますようお願いいたします。

2015年7月1日

NPO法人 働く文化ネット 労働映画百選選考委員会

## 【あなたのおすすめ「日本の労働映画」】

あなたにとってもっとも印象に残った日本の労働映画、多くの人に見てほしいと思う日本の労働映画を3本以内でお選びいただき、上記の「労働映画スペシャルサイト」でご記入ください。

【労働映画の具体例】従来の枠にとらわれず、幅広く、自由に考えることとしています。例えば…

- ・腰辨頑張れ(1931年、監督:成瀬巳喜男、出演:山口勇)  
家族を抱えて奮闘する保険勧誘員の男。人に頭を下げなければならぬサラリーマンの悲哀を描く。
- ・女の一生(1949年、監督:亀井文夫、出演:岸旗江)  
第3次東宝争議を挟んで撮影された作品。活版工の女性が、仕事と家庭の板挟みとなって苦闘する。
- ・にあんちゃん(1959年、監督:今村昌平、出演:長門裕之)  
九州の炭鉱町を舞台に、両親を亡くした4人兄妹が懸命に生きる姿を重厚なリアリズムで描く。
- ・その場所に女ありて(1962年、監督:鈴木英夫、出演:司葉子)  
広告業界の営業担当として働くヒロインの「男社会での闘い」をクールに描いた、先進的な女性映画。
- ・ある機関助手(1963年、監督:土本典昭、ドキュメンタリー)  
電化を控えた国鉄常磐線・水戸―上野間を運行する蒸気機関士たちの労働をダイナミックに綴る。
- ・家族(1970年、監督:山田洋次、出演:倍賞千恵子)  
大阪万博に沸く日本列島を、長崎の炭鉱から北海道の開拓村へ移住していく一家。
- ・フリーター(1987年、監督:横山博人、出演:鷺尾いさ子)  
OLでもサラリーマンでもない「フリーター」たちの青春群像が、1980年代の若者風俗とともに描かれる。
- ・アニメーション制作進行くろみちゃん(2001年、監督:大地丙太郎、アニメーション)  
過酷な職場として知られるアニメ業界内幕もの。新人制作進行の女性が放送に間に合わせようと奔走する。
- ・こんばんは(2003年、監督:森康行、ドキュメンタリー)  
東京・墨田区の夜間中学で学ぶ17歳から92歳までの生徒たち、それぞれの人生を見つめる。
- ・WOOD JOB!(ウツジョブ)(2014年、監督:矢口史靖、出演:染谷将太)  
都会育ちの若者が、危険と隣り合わせの林業の現場で悪戦苦闘しながら成長していく姿を描く。

【テーマ研究】《土木》を描いた作品 資料作成:清水浩之

日本の労働映画の歴史を辿るとき、縦軸には「時代」があり、横軸には様々な職業や仕事の形態、労働の意義や現場の課題など、多岐にわたる「テーマ」が広がっている。ここでは毎回ひとつの「テーマ」をとり上げ、時代ごとにどんな作品が生まれたかを眺めていく。

第1回は《土木》の現場を描いた作品を集めてみた。この分野では古くから建設記録映画などが作り続けられている。また、公益社団法人・土木学会が積極的に作品の紹介や上映に取り組んでいて、昨2014年には『土木映画の百年 土木技術映像100特選ガイド』(言視舎)も刊行されたので、こちらをご参照いただきたい。

ジャンル:【劇】劇映画 【記】記録映画 【TV】テレビ番組 市販ソフト:[DVD][VIDEO]  
 アーカイブ:[NHK]NHK番組公開ライブラリー 【放】横浜・放送ライブラリー 【土木】四ツ谷・土木図書館

【劇】 酬ひられぬ人(1929) 松竹蒲田  
 監督/今野不二夫 原案/金森誠之(しげゆき)  
 印旛沼の水門建設に取り組む土木技術者を描く。内務省技師で映画製作も行った金森が原案および撮影指導。  
 【記】 アスファルトの道(1930) プロキノ 監督/岩崎昶  
 近代都市の舗装道路を、その建設に従事する労働者、道路の持つ軍事的意味などを通じて捉え直す。  
 【劇】 どぶろくの辰(1949)  
 大映東京 監督/田坂具隆 出演/辰巳柳太郎、水戸光子  
 北海道の道路工事現場で働く男が、夫の復員を待つ女に恋するが…。広島で被爆した田坂具隆の戦後復帰作。  
 【記】 佐久間ダム 総集編(1958)  
 岩波映画 企画/電源開発 監督/高村武次  
 ダム工法を革新した画期的な事業とされる天竜川中流・佐久間ダムの建設過程を、カラーフィルムで記録。[DVD]  
 【記】 黒部峡谷 3部作(1957-61)  
 日映新社 企画/関西電力 監督/西尾善介、山添哲  
 黒部川第四水力発電所の建設記録。トンネル掘削開始から発電所への通水・運転開始まで。  
 【記】 海に築く製鉄所(1959)  
 岩波映画 企画/八幡製鉄 監督/伊勢長之助  
 福岡・戸畑製鉄所の3年余にわたる建設記録。敷地を海に求め、地質調査、埋め立てを経て製鉄所を造り上げるまで。  
 【劇】 二人で歩いた幾春秋(1962) 松竹大船  
 監督/木下恵介 出演/佐田啓二、高峰秀子  
 歌集「道路工夫の歌」を基に映画化。山梨で工夫として働く男と、彼を支える妻の半生を、短歌とともに綴る。[DVD]  
 【TV】 半年もぐら(1967) NHK 演出/若生豊隆、鈴木幹夫  
 青森県下北半島の東通村から、半年間東京に出て地下鉄工事現場で働く人々を描く。[NHK]  
 【劇】 黒部の太陽(1968) 三船プロ=石原プロ  
 監督/熊井啓 出演/石原裕次郎、三船敏郎  
 世紀の難工事と言われた黒部ダム建設。電力会社などが前売券を大量購入した「動員映画」の先駆け。[DVD]  
 【TV】 故郷はいま(1973) 長崎放送 構成/花田篤信  
 山陽新幹線トンネル工事現場で働く長崎出身者グループなど、農漁民の状況や出稼ぎの実態を追う。【放L】  
 【記】 青函トンネル 本州側工事の記録(1977)  
 鹿島映画 監督/吉田巖、田代公幸  
 あと10kmの地点まで掘り進んだ工事の記録。[DVD]  
 【劇】 海峡(1982)  
 東宝 監督/森谷司郎 出演/高倉健、森繁久彌  
 洞爺丸事故から約30年にわたり、青函トンネルの建設に執念を燃やし続けた国鉄の技師たちの物語。[DVD]

【記】 アクアの肖像 横濱水道物語(1987)  
 電通映画社 企画/横浜市水道局 監督/加瀬泰  
 横濱の「新式水道」敷設に尽力した英国人技師、ヘンリー・スペンサー・パーマーの評伝。【土木】  
 【記】 野中兼山 流れる河は生きている(1987)  
 シネドキュメント 企画/四国電力 監督/樋口源一郎  
 江戸時代初期、土佐藩家老の野中兼山が進めた独創的な治水工事。今に生きる総合開発の足跡を辿る。【土木】  
 【記】 柳川堀割物語(1987) 二馬力 監督/高畑勲  
 福岡県柳川市の水路網の成り立ちから、今に生きる知恵、堀割の再生をめざす住民の取り組みを追う。[DVD]  
 【劇】 ドトウの笹口組(1995) KSS  
 監督/金田敬 出演/ウド鈴木、佐藤允 [DVD]  
 若林健次のマンガを実写化。アットホームな土建会社に、暴走族、イラン人など多彩な仲間が集まる人情コメディ。  
 【記】 洪水をなだめた人びと(1997)  
 文化工房 監督/田部純正  
 荒ぶる川の多い日本で、治水と水防に苦労を重ねてきた先人たちの様々な知恵と工夫。【土木】  
 【記】 人として生きる(2002) 青銅プロ 監督/片桐直樹  
 石炭・鉱山・トンネル・造船などの労働現場で生まれた「じん肺」患者たちの四半世紀の闘いの記録。  
 【記】 掘るまいか 手掘り中山隧道の記録(2003)  
 フィールドワークス 企画/山古志村隧道文化基金  
 監督/橋本信一  
 新潟県山古志村で、村人たちが16年かけて掘った手掘りトンネルの歴史。  
 【記】 われら生コン労働者(2003)  
 日韓生コン労働者共闘委 企画/全日建連帯労組  
 監督/小林アツシ [VIDEO]  
 建設現場で使われる生コンを配送する運転手たち。日韓両国で問題となっている「ミキサー車持ち込み制」を追及。  
 【記】 ツツの仕事をしたい(2008)  
 ローポジション 監督/土屋トカチ  
 劣悪な労働環境の改善を求めるセメント運搬車ドライバーの苦難の日々を、連帯ユニオンの闘いとともに描く。[DVD]  
 【TV】 フリーター、家を買う。(2010) フジテレビ  
 演出/河野圭太ほか 脚本/橋部敦子 出演/二宮和也  
 有川浩の小説をドラマ化。母の発病をきっかけに一念発起した青年が、土木工事の現場でのアルバイトを通して、労働の意義や仕事仲間との人間関係を再発見する。[DVD]  
 【劇】 サウダーチ(2011)  
 空族 監督/富田克也 出演/田我流  
 山梨県甲府市を舞台に、土木労働者・在日外国人・ラッパーの若者らが地方社会で直面する現状を俯瞰的に描く。

※このリストを引用する時には【労働映画百選より】と付記いただきますよう、お願いします。

【作品ガイド】『太陽の王子 ホルスの大冒険』 文:波多楽久

1968年/82分 東映動画 監督/高畑勲 脚本/深沢一夫 作画監督/大塚康生  
場面設計・美術設計/宮崎駿 声の出演/大方斐紗子、市原悦子、平幹二朗 ほか

アイヌの伝承をモチーフにした深沢一夫の人形劇戯曲『チキサニの太陽』を基に創作された長編アニメーション映画。1968年夏の「東映まんがまつり」で公開された。

岩の巨人モーフを助けた少年ホルスは、《太陽の剣》を譲り受けた。やがてホルスは、謎の少女ヒルダの助けを借り、世界征服をたくらむ魔王グルンワルドに立ち向かうことになるが…

スタジオジブリの原点 組合活動から生まれた先駆的な「シリアス」アニメ

1956年、「東洋のディズニースタジオ」を目指し発足した東映動画（現・東映アニメーション）。アニメーションを志した多くの若者が集まり（初期には手塚治虫も企画や演出で参加した）、やがてここから独立したスタッフが「虫プロ」「タツノコプロ」など多くのプロダクションを創設し、現在のアニメ界を支えていく。

一方で、ディズニーの数分の一に過ぎない制作期間と予算で長編アニメーション映画を作らなくてはならない状況に対し、現場スタッフは労働条件の改善を求めて1961年に「東映動画労組」を結成。《よい漫画映画をつくろう》をスローガンに、オリジナル作品の企画開発にも取り組むようになる。

東映動画一期生のアニメーター・大塚康生、テレビアニメで演出家になったばかりの高畑勲、そして1963年入社の新入・宮崎駿は、日々従事する業務よりも先に、組合での活動を通じて知り合い、やがてともに作品を手掛けることになったという。彼らを中心に各部門の有志が集まって企画を検討し、「自分たちが作りたい映画」を追求した作品には、主人公・ホルスが住み着いた村の住民の生活や労働の描写に力が注がれるなど、当時のディズニーとは比較にならない重厚な世界観が描き出された。公開当時は漫画映画に「なくてはならないもの」と考えられていたユーモアの欠如が指摘されたのをはじめ、「お子さまにはいささか高尚」な作品と見られ、興行的には失敗した。だが、こうしたシリアスな世界観は後の『宇宙戦艦ヤマト』『機動戦士ガンダム』などの先駆となり、今の視点から見るとあまり違和感はない。

高畑と宮崎は1971年に東映動画を離れ、『アルプスの少女ハイジ』『赤毛のアン』などの成功を経て、1984年公開の『風の谷のナウシカ』をきっかけにスタジオジブリを創設する。その後の彼らの仕事には、創作活動の原点となったこの作品の影響が感じられるだけでなく、何よりもスタジオジブリという場所自体が「組合」の延長線上にあるような気もする。



[DVD] 東映ビデオ

【労働映画のスターたち】第1回「志村 喬」 文:百永良武

<「七人の侍」「生きる」「野良犬」…。寡黙で照れ屋で、頑固だが内に優しさを秘めた男、そんな“日本の父”を演じつづけた俳優。澤地久枝のノンフィクション『男ありて—志村喬の世界』（文藝春秋）の紹介文の通り、日本映画の黄金時代を代表する「おじさん」「お父さん」として活躍した志村喬（1905～82）。労働映画史上、いや日本映画史上屈指の作品『生きる』（1952、監督：黒澤明）で、長年ただ無気力に「お役所仕事」をこなしてきた公務員が癌で余命半年と知り、自分のできる最後の仕事に情熱を注ぐ姿は、日本人なら誰でも見覚えのある人物像とも言えそうだ。

明治38年、兵庫県生野町（現・朝来市生野町）生まれ。父は生野鉦山の冶金技師だった。関西大学在学中に演劇に魅せられ、中退して役者の道へ。舞台俳優として数々の苦労を味わった後1934年新興キネマに入社。伊丹万作が監督した『赤西蠣太』（1936）での朴訥とした侍の演技が注目され、アラカン＝嵐寛寿郎の『右門捕物帖』シリーズでのライバル同心・アバタの敬四郎が当たり役となる。オペレッタ時代劇『鴛鴦歌合戦』（1939、監督：マキノ正博）では美声を披露し、共演者のディック・ミネに歌手デビューを勧められたとも言われている。

戦後は『酔いどれ天使』（1948）での町医者を皮切りに、黒澤明作品に欠かせない存在となり、『野良犬』（1949）のベテラン刑事、『七人の侍』（1954）の頭領格・勘兵衛など合わせて21本に出演。『生きる』ではニューヨークタイムズに「世界一の名優」と絶賛された。

同時に、東宝を中心に邦画各社の映画に重要なバイプレーヤーとして出演。演じた職業も科学者（『ゴジラ』1954、監督：本多猪四郎）、プロ野球監督（『男ありて』1955、監督：丸山誠治）、炭坑夫（『どたんば』1957、監督：内田吐夢）、高利貸（『裸の町』1957、監督：久松静児）、厩務員（『花の大障碍』1959、監督：島耕二）など多岐にわたる。渥美清主演『男はつらいよ』シリーズでは印刷工場で働く博（前田吟）の父を演じ、寅次郎に人生の儂さを論じた。

東京・京橋のフィルムセンター展示室で「生誕110年 映画俳優 志村喬」が開催される（8月18日～12月23日）。9月26日～11月15日の期間には代表作の特集上映もある。



野良犬(1949)



生きる(1952)



男ありて(1955)



## 【レポート】第20回 労働映画鑑賞会

2015年7月9日(木)「一番大切なものを守る仕事」

上映作品:『あーす』1991年/82分「あーす」製作委員会

監督:金秀吉 出演:坂口昌裕、趙方豪、芦屋小雁、生瀬勝久

2015年度7~9月期は、「いま働くということ」を統一テーマにプログラムを組んでいきます。今回はごみ収集車に引き付けられる少年と、彼を取り巻く人々の姿を通して、地球環境という一番大切なものを守る仕事について考える映画をとりあげます。この作品は、大阪・十三の映画館「サンボード・アップルシアター」が創立80周年記念企画として、母親たちから公募した原案作品を映画化したものです。

### 【感想】

今回の上映作品は、少年がごみ収集車とその作業員に出会い、やがてごみの収集作業を手伝うようになっていきます。彼と彼を取り巻く人々の姿を通して、地球環境という一番大切なものを守る仕事について考えさせられる映画でした。

ご来場いただいた東京清掃労働組合 吉田委員長から、次のようなお話をいただきました。



- ・映画の中で描かれている清掃労働について、安全衛生面から見て問題が多くあり、現実の作業とは違っている。
- ・東京の環境事業の現在、ごみの減容化等についてコメント・劇中で「この仕事好きか」と少年に聞かれ清掃労働者が「自信がない」と答えるシーンがある。それが現実だと思う。職業差別も実際にはまだ残っているが、映画にもあったように子供よりも大人がその環境をつくっている。これについては、我々自身を変えていかなければならない。実際、皆で衛生的になるよう変えていくことで、周りの見る目は変わってきている。また小学校における学習には、現場の人達が直接教育現場に出向いて話をしている。自分たちから情報を発信していけることで改善につながっている。
- ・現在、清掃従事者の公務員は減ってきている。これはごみ収集作業が、民間業者に委託されているからだが、これにより、労働条件が悪くなっていくと職業差別につながってってしまう。東京清掃労組としては、公務員のみにとどまらず、清掃労働従事者全体の労働条件が改善するよう運動している。

## 【次回予告】第21回 労働映画鑑賞会「仕事の中の自分をみつめて」

統一テーマ:いま働くということ

日時:9月10日(木)18:30~20:30(18:00開場)

場所:連合会館 2階 201会議室(地下鉄 新御茶ノ水駅 B3出口すぐ)

参加費:無料(事前申込不要、どなたでも参加できます)

上映作品:『シップヤードの青春』1969年/44分

企画:日本造船工業会 制作:岩波映画製作所

監督:神馬玄佐雄 脚本:清水邦夫 撮影:西尾清

入社3年目、20歳の造船所溶接工を主人公に、仕事と暮らし、青春や前途を見つめる姿を描いたセミドキュメンタリー作品。

働く文化ネットでは、毎月第2木曜日に労働映画鑑賞会を開催しております。お気軽にご参加ください。お待ちしております。

